

民国期の四川西北地区における アヘンの栽培売買と族群政治

——雑谷脳河流域を中心に——

王 田
(訳 嶋田 聡)

●●●●●

広がりについても考察した。

一 ケシが雑谷脳河流域に入ってきた背景

中華民国が始まって間もなく、四川西北地域の雑谷脳河流域およびその周辺地区にケシが入ってくると、直ちに区域内の各族群（エスニック・グループ）と政治勢力はことごとくアヘンの作付け販売市場のネットワークに巻き込まれていった。本論文はアヘンが蔓延した背景に関する論考を基礎とした上で、アヘンの収穫、買付け、流通販売過程における特定区域の歴史的風景である「趕煙会」「袍哥」「煙幫」について考察した。続いて、アヘン作付け禁止問題に関して漢族の有力地主や退職官吏と地方政府との間で繰り広げられた綱引きの様相、つまりは区域内族群政治の側面に現れたアヘン市場ネットワーク・アンテナの深度や

アヘンは、清の雍正年間（一七二二—一七三五）にインドから中国へ流入し、清末には四川は国内最大のアヘンの生産と消費地区になった。一九〇六年の四川産のアヘンは全国総量の四〇%を占めた。そこで一九一〇年から民国初年まで、四川総督・趙爾巽は効果的なアヘン禁止運動を展開した。しかしい状態は長続きせず、「南北分治」と軍閥紛争の情勢下で、一九一八年以降、四川地区には再びケ

シが蔓延し始めた。⁽³⁾

清末期の雑谷脳河流域でケシの栽培や交易が行われていたことを示す直接的な証拠はない。むしろ、甘堡屯の最後の守備・桑梓候の回想によれば、一九一九年前後に誰かが黒水や小金からケシの種を持ち込み、雑谷脳河流域で試験栽培を始めたという。⁽⁴⁾一九一九年が正確であるかどうかはさておき、少なくとも民国初年から、アヘンはしだいに四川の西北地域で栽培や流通売買が行われるようになったことは確かである。また、ケシ栽培が雑谷脳流域に入ってくる以前に、周辺の黒水河流域、大渡河上流の小金川地区では、禁止政策が緩んだためにすでにケシ栽培が行われていたことがわかる。

ここで明確にしなければならないのは、ケシ栽培とアヘン消費の区別である。地方の頭目は次のように回想する。清末民国初期に内地から理番役人としてきた官吏たちはほとんどみな「アヘン吸飲」の習慣があり、しかも官界では、アヘンは体裁よく客をもてなすための必須品となっていて、吸引具もとても豪華であった。こうした気風の影響を受けて、雑谷脳や通化などの地方の上層人士や五屯の守備などが次々とそれをまねた。⁽⁵⁾即ち、清末民国初期の雑谷脳河流域の官界と地方上流社会にはすでにアヘンの消費という事象があったが、この流域でのケシ栽培は少し後の一九一九年頃からであろうと推測される。

雑谷脳河流域内でのケシの大規模栽培には、三つの利点があった。その一、雑谷脳河流域は寒冷で乾燥しており、ほとんど雨が降らず、日射は強く、土壌は砂土や黄土が主体なので、寒さに強く日照を好むケシの生育に適していること。その二、他の経済作物と比べると、アヘンは携帯に便利であり、利潤もきわめて大きいので、各族群がケシ栽培に強い意欲をもったこと。その三、最も重要な推進力は、四川の地方軍閥紛争がもたらした効果であったこと。

民国期の四川軍閥統治の主な特徴は防区の割拠であり、防区の大小と軍閥勢力の強弱とは密接に関わっていた。⁽⁶⁾防区内において、軍閥は税収を差し止めて税金を一手に掌握し、財政官吏を任命する権限を有した。⁽⁷⁾民国七年（一九一八）七月、軍閥・熊克武は「四川靖国各軍總司令」の名義で、「四川靖国各軍衛戎及清鄉剿匪区域表」を公布した。これは雑谷脳河流域内の四川西北地区の岷江上流、大小金川地区の八つの県境が「第九区」に属し、西路漢軍の管轄であることを示した。⁽⁸⁾翌年、この区域の大部分の地区（五つの県）は、「屯殖駐防区域」に合併された。⁽⁹⁾民国十一年（一九二二）、四川大邑系軍閥・劉成勳（号は禹九）は、四川軍總司令兼四川省長に就任し、その勢力は四川西北地区におよび、劉成勳部隊の第八混成旅団は雑谷脳河流域に進駐した。桑梓候の回想と照らし合わせると、一九二二年は、ケシがこの流域内に蔓延するようになった時間の結節

点である。

一九二二年理県の駐屯軍は四川軍閥・劉禹九の部隊の第八混成旅団であり、旅団長は鄭世斌である。当時理県ではすでに少数の農民が自発的にケシを栽培していた。聞くところによれば、当時の県知事、紳糧、屯官、団総などは理県でアヘン産業を大規模に発展させることを要求し、鄭世斌もこの要求に同意したが、毎年必ず銀貨で二万円を第八混成旅団に納めて軍人の俸給としなければならぬと定めた。県府がこの銀貨二万円を徴収してそれぞれの郷屯に分配するようになり、以降、理県では大規模なケシ栽培が始まった。

これによれば、雑谷脳河流域では一九二二年以前にすでに少量のケシ栽培が行われていたが、当地でのケシ栽培の普及を促進した最大の原動力は、四川軍閥と理番当局の利益に対する妥協の結果だったといえる。換言すれば、一九二二年になるやケシ栽培は秘密あるいは半公然から公然へと変わった。その後、当地を支配する軍閥は頻繁に変わったが、四川軍閥が支配する四川西北地区のケシの栽培と流通売買の情勢は変わることがなかった。

二 「趕煙会」と区域社会の相貌

「趕煙会」とは、雑谷脳河流域で行われるアヘンの収穫

や買い付けなどを表す固有名詞である。毎年旧暦六〇九月の趕煙会が集中する時期には、決まって当区域内外で慌ただしい人口流動が起きた。

実は、高山部以外の雑谷脳河流域の大部分の地域では、たびたび四川当局によるアヘン禁止運動に対処しなければならず、ケシ栽培は断続的にならざるをえなかった。これに対して禁政の力がおよばない後番（黒水河流域）、四土（梭磨河流域）、懋功（小金川流域）では、ケシ栽培が大規模に行われていただけでなく、中断されることもめったになかった。そのためこれらの三地域では、ケシの栽培期、特に収穫期にはいつも深刻な労働力不足となり、隣接する雑谷脳河流域の各族群集団や四川内地の漢人が定期的に大挙してきた。

注目されるのは、内地の漢人が後番、懋功、四土に來る際、ほとんどの場合、雑谷脳河流域に連接する溝（峡谷）に沿って入ることである。例えば龍溪溝、三岔溝、孟董溝は後番の趕煙会への伝統的なルートで、梭羅溝、紅橋溝は懋功へ入る重要な幹線ルート、来蘇溝は四土への既定のルートである。即ち、趕煙会の中心地が雑谷脳河流域ではないとしても、後番や四土、懋功は、雑谷脳河流域の地理や人々、市場に連結し依存しあっており、まさにそうすることでこれらの地域がアヘンの栽培と売買が総体化した地域として繋がりが合えるのである。

例えば、雑谷脳河下流の民衆にとつて趕煙会の地は後番である。当地でいう「後番」区域とは地理的境界がかなり曖昧で、黒水河流域の三龍や赤不蘇、雜古、色爾古、麻窩などを広く含んだ。趕煙会に行く人々は、雑谷脳河下流北岸の龍溪の阿爾溝、通化の三岔溝と孟董溝およびその他の溝、あるいはもっと小さな溝を越えてようやく後番に辿り着いた。民国期、後番は、行政上は理番県に属したが、実際は当地の少数民族の首領が分割統治した。彼らは広大な土地でケシを栽培し、アヘンの売買によって物資や銃器弾薬を得、侮ることのできないほどの軍事力をもった。当時、赤不蘇曲谷の首領・王泰昌家の趕煙会に数回参加した桃坪羅山寨のチャン族・楊万清は、当時の経験は今も記憶に新しいと次のように語る。

国民党統治時代、後番は管理不能の地域であった。

そこではすべての土地でケシが栽培されており、一帯の人々は六月になるとすぐに後番の趕煙会に行かなければならなかった。私たちは王泰昌家でケシの収穫を手伝ったが、とてもにぎやかで、曾頭や桃坪一帯の若者も大勢が一緒に行き、外地の安岳や樂至からの人々もいたるところにいた。後番へは主に二つのルートがある。一つは、通化三岔溝を通り、「余祝谷」(Yuzhu Valley)峠を越え、さらに牛場や滴水岩窩、塔子を通り、「馬塘寨」「而語寨」などの「黒鉢六寨」へ至るルート

で、王泰昌の勢力地盤である。もう一つは龍溪溝の三座磨や十座磨、長岩窩を通つて龍池、三齋一八寨へ至るルートで、舵把子(四川の幫会の一つである袍哥の首領)の張天雲の勢力地盤である。私たちが最もよく通つたのはやはり王泰昌の「黒鉢六寨」だった。

王泰昌家のケシ畑は二〇〇畝以上もあり、少なくとも数十人が毎日ケシを収穫した。アヘンの収穫とは生煙(訳注「未精製のアヘン」)を収穫することで、生煙は露水煙ともいう。早朝からケシ畑にいつて、一人て一日約一〇畝の生煙を収穫する。一〇畝の生煙からは五銭の熟煙(精製されたアヘン)ができる。この一日五銭の熟煙が、私たちの工賃になる。毎回後番の趕煙会から戻ってくると、この一帯では一銭の熟煙を一斗の食糧と交換できた。基本的に、一回趕煙会にいくと一〇畝くらいの熟煙を持ち帰ることができた。私たちは熟煙を身につけて運ぶようなことはしなかった。なぜなら三岔溝口や通化、龍溪阿爾、東門外にはすべて関所があつて、関所を守つていたのは国民党の保安隊であり、見つかると一〇畝につき二両の熟煙を抜き取られるからである。そこで私たちは、煙幫に取り入つて彼らに品物を背負わせ、ただで熟煙を運んでもらつた。国民党の保安隊は煙幫の検査までは敢えてしなかつたので、こうして無事に関所を通過し、熟煙を持

ち帰って、一回につき二萬元以上も稼ぐことができた。⁽¹³⁾

雑谷脳河流域および内地漢人のアヘン商による後番、四土、小金での活動以外に、甘肅の回族商人を中心とする西北アヘン商の存在も注目される。西北回族商人とは曖昧な言い方であるが、その中核は甘肅洮州臨潭地区のムスリム商人グループである。民国二十七年（一九三八）、顧頤剛が西北で調査をした際、臨潭旧城におけるかつての商業の輝かしい繁栄の様子が彼に強い印象を残した。「故旧城の商業は、東は陝西へ、さらに長江に沿って天津、上海へと達し、西は青海へ、南は四川、甘肅康県へと至り、北は内外モンゴルまでおよんだ。民国一七年の破壊される前の繁栄ぶりが想像される⁽¹⁴⁾」。これによれば、遅くとも民国期には、洮州臨潭の回族商人の貿易版図はすでに四川、甘肅康県、チベットの区域を覆っており、当然そこには貿易ルート上必ず通る四川西北地区も含まれていたことが推測される。

洮州の回族商人は、民国中後期には黒水、小金川、梭磨河流域で空前の活躍を見せており、市場の配置にこれほど激烈な変化をもたらした誘因は、まさに当地でケシ栽培が広く行われたことにあった。この時期、洮州回族商人の貿易の重心は、以前の茶葉と食塩から、利潤のより大きいアヘン売買へと移っていた。いうまでもなく、アヘン貿易を通して、彼らと四土、後番（黒水）、懋功、雑谷脳等の地区の人々との間には広く深い交流が生まれた。

茶葉や漢方薬材が貿易の主要产品だった清末民国初期においては、四土地区は完全に雑谷脳の市鎮に帰属しており、ヴァルター・クリスタラー (Walter Christaller) のいう中心地の「補完区域⁽¹⁵⁾」であった。また、四土と草地に隣接する馬塘は、雑谷脳市場を背景に商業と貿易の要地にまで発展した。辺疆服務部川西区主任の崔潤徳がいうように、「馬塘は鷓鴣山の北側にあり、……商業では雑谷脳の下位に位置するが、交通では四土の中心である。以前の草地の貿易品、例えば茶、布、漢方薬材、毛皮などは、多くが馬塘を経て雑谷脳に運ばれており、松潘を経ることはほとんどなかった。なぜなら、西路に沿っていくルートは、北路（松潘經由）と比べて四日も短縮できたからであり、……草地を歩き来する商人たちは松潘を捨てて馬塘を通り、それ故に馬塘はすぐに四土の商業の中心となった⁽¹⁶⁾」。馬塘を雑谷脳、四土、草地間を結ぶ重要な経田地とみる認識について、崔牧師の論述は妥当である。ただし、ごく短い間に卓克基土司管轄の馬爾康が四川西北地区のアヘン交易の中心になったことについては、補完区域が中心地へと転換する迅速かつ猛烈な発展の勢いがあったことが大きく、その直接の推進力は主に洮州の回族商人による生煙の売買にあった。一九五〇年代の少数民族調査組はこの事実に関してかなり詳細に記している。

回族商人の多くは甘肅洮州などの地域からきてお

り、行商を主とする。馬爾康でケシの大量栽培が始まってから、彼らは大人数でやってきて生煙を仕入れ、よそへ運んで売る。元手が大きい者は数万元（銀元）にも達する。毎年旧曆八く九月の間、甘肅商人たちは綿布や小麦粉、銅器、銃弾などを携えて馬爾康の趕煙会にやってくる、馬爾康では一時的にテントに泊まるので、いつも数百のテントが設営される。甘肅商人は馬爾康の生煙を甘肅へ運び、さらに新疆などの地域へ輸送する。……馬爾康は四土や大金、小金、綽司甲のアヘン集散地となり、四土の重要な市鎮となった。¹⁷⁾

もしも洮州の回族商人を単なる商人の一群だと見なすのであれば、それは明らかに彼らの四川西北地区の政治経済体制における力を低く見すぎている。民国三二年（一九四三）、于式玉は洮州の回族商人と麻窩の族長・蘇永和との特別な関係について知った。麻窩の役所には長期間甘肅臨潭の回族商人が宿泊しているが、于式玉はその中の臨潭の王という姓の商人と蘇永和が代々の付き合いがあることを知った。黒水地区の族長の間にはしよつちゅう抗争があり、蘇永和と兄の蘇永清は二度臨潭へ逃れたことがあって、蘇永和は「王回回」の妻の実家に五年住んだこともあった。于式玉によれば、西北の回族商人は馬塘を経由して黒水流域を通るので、ほとんどみな蘆花の役所に駐留するが、その地は臨潭の回族商人の対外活動の根拠地で

ある。¹⁸⁾ 蘇永和と臨潭の回族商人は互いに助け合う関係を築いていた。

反対に、洮州の回族商人との貿易交流を通して、蘇永和が支配する四川西北高原、とくに四土の梭磨地区当地に對して経済的な支援がもたらされた。林耀華がいうように、四土の梭磨土司の動向はギャロン・チベット族の命運に直接影響をおよぼす。林によれば、蘇永和は武力による出征、婚姻関係、政治手腕を通して梭磨を含む四土を支配し、「近現代ギャロン・チベット族で唯一の指導者となった」¹⁹⁾。全体として、林耀華の論述は当時のギャロン・チベット族に関する四土の政治情勢を明察しているが、その視野はやや狭い。もし林が于式玉夫婦のように甘南と黒水で実地調査を行った経験があれば、蘇永和の背後に洮州の回族商人、ひいては甘南藏族自治州夏河県のラブラン寺勢力の支援があったことを理解できたであろう。

数年後、少数民族調査組は四川西北地区の草地へ入り、その調査報告は前述の仮説を側面から証明した。阿壩は四川西北草地最大の部落であるが、その拡張過程において黒水と甘肅夏河ラブラン寺勢力という南北二つの方向からの抑圧を受けた。中阿壩部落と夏河方面には数回武装抗争が発生しているが、蘆花の族長・蘇永和は夏河の側に立ち、蘆花において阿壩の土官をおびき寄せて殺害した。²⁰⁾ 夏河ラブラン寺地区の複雑に入り組んだ族群政治関係の中には馬

歩芳回民武装勢力に関する噂があった⁽²¹⁾、馬歩芳は四川西北地区の毛皮や漢方薬材、アヘンの貿易を漁っており、夏河チベット民の阿壩地区に向けた領土拡張は、彼が推進したものだ⁽²²⁾という。

以上によれば、西北の回族商人が四土や黒水、小金およびその周辺地区に入ったのは、活動範囲から明確であり、生煙の収穫と運搬であったといえる。ただしこの特殊品をめぐる栽培や収穫、買い付けという各段階において、多くの族群と政治勢力を内に巻き込んでいた。つまり、趕煙会は成都平原や雑谷腦河流域、四土、後番（黒水）、小金、阿壩草地、甘南夏河、洮州等々の広大な地域およびその中の各集団をつなぎ合わせ、民国期の四川西平原—四川西北高原—甘南間の族群接触に関する歴史的風景を描き出すものといえる。

三 アヘンの流通売買と袍哥・煙幫

民国政府と四川当局は、多くの場合、アヘンの流通売買において表向きは禁止しつつも裏では放置し、四川軍閥はそれに介入することで軍事費を拡充し、実力を強大化した。多くの当事者たちがアヘン貿易によって「政策に穴を開ける」ことを願っており、このような状況は自ずと生煙の運搬の危険度を高め、武力による護送なしには運搬不能

な状態とした。煙幫とは、このようなアヘン運搬を武装して護送する人々あるいは勢力をいう。

雑谷腦河流域を含むアヘンの輸送では、煙幫と秘密結社（袍哥）が終始入り混じって存在した。袍哥が清末から民国期にかけて四川地区で勢力を拡大したのには多くの原因がある。伝統的小農経済の急速な商品化、それに続く市鎮経済の発展という清末から民国期にかけての流動的な社会情勢の中で、多くの難民と統率者を失くしたばらばらの兵隊が生みだされ、伝統的社会組織ではこれらの人々を組み合わせることが難しく、国家も何の手立ても講じられなかった⁽²³⁾。また同時に、アヘンの流通売買における高いリスクが「集団の力、広範な関係、緊密なネットワーク」を必要としたため、袍哥はこのような市場の要求にたちまち応じて煙幫と関係を結び、袍哥それ自体が煙幫と一体化した。袍哥と四川西北山岳地帯とのあいだは、あるいは清末宣統二年（一九一〇）までさかのぼることができる。当時の四川灌県の舵把子・張捷はまず岷江上流地区へと入り、さらに威州に袍哥の埠頭「恒聚公」を建設した⁽²⁴⁾。汶川瓦寺土司・索代庚は雑谷腦下流地区を含むこの地域の早期の袍哥首領であった⁽²⁵⁾。民国初年、袍哥は雑谷腦河流域の重要地である雑谷腦に埠頭を作り、堂号を「吉安公」とし、後に「協興公」に改名した。この一派は名前を「鳳山沱水松柏堂」といい、松柏堂は雑谷腦陝西会馆の関帝廟に属した⁽²⁶⁾。

表1 民国期雜谷腦河流域における袍哥埠頭の堂号

埠頭の場所	堂号	重要な舵把子	管轄区域	隸属関係
威州	恒聚公	車子権	流域下流龍溪溝口から岷江合流地点	総社
	品聚公		布瓦寨、龍山寨、大小寺寨	恒聚公
	永聚公		克枯地区	恒聚公
	成聚公		鉄邑、増坡、麻邑	恒聚公
	興聚公		龍口、禹碑嶺、羊嶺、茅嶺	恒聚公
	同聚公		新橋、板子溝、郭竹鋪、木蘭寨	恒聚公
通化	広柔公	賈開允	通化、桃坪地区	総社
桃坪	九興公	楊光遠、陳東山	後三枯各寨	広柔公
甘溪	薛興公		通化甘溪地方	広柔公
爾瓦寨	九合公	楊繼云	九子屯各寨	
薛城	薛乾公	郭秉山、張輝武、焦如淵、雷友三	薛城地区	総社
興隆場	吉安公 協興公	劉德沛、王蔭三、楊純武、倪樹森	雜谷屯	総社

出所：当地の内部事情を知る人物へのインタビュー、および理県志編纂委員会編纂『理県志』四川民族出版社、1997年を参照。

陝西商人と袍哥が互いを頼みとしながら、各族群の周辺地区における利益を追求していったことがわかる。しかし、袍哥が本格的に雜谷脳河流域内で広範で緊密な組織体系を築き上げたのは、ケシが雜谷脳河流域およびその周辺の後番、大小金川、四土であまねく栽培されるようになってからである。この過程について、当地の人々の記憶はともはつきりしている。

この溝をひたすら西に行くと威州、通化、薛城、興隆場（雜谷脳）があり、そこにはかなり大きな袍哥の埠頭があり、鷓鴣山を越えた馬塘には雜谷脳埠頭の支部がある。いうまでもなくそこには市場があり、村の中にも袍哥がいた。すなわち、上は土司の族長や守備、郷長、下は保長や小商店、チンピラまでもがみな袍哥に加入した。我々の溝の袍哥は、灌県の袍哥のお偉方ともいささか関係を結んでいた。生煙の運搬はいうまでもない。軍閥は袍哥のお偉方で、煙幫とは袍哥のことである。当地や四土、後番、小金などにきて生煙を運び、理番の袍哥は、世話をするとして当然のように利益の分け前を要求した。袍哥はアヘンの運送を完全に支配していたため、保安隊や緝煙隊は決して煙幫に手をださず、道中は何の障害もなく通行できた。しかし、一般人が生煙を運び出そうとすれば、リスクは大きく、道中至るところに関所の検査があり、土匪

や渾水袍哥が途中で強奪することもあった。²⁸⁾

こうしてみると、生煙の流通売買と袍哥の勢力が流域内に蔓延したことは同時発生的な関係にあったことがわかる。生煙の流通売買における高い利潤が袍哥組織の発達を刺激し、同時にその運営資金を保障した。逆にいえば、袍哥が流域内の各族群の有力者たちを緊密な組織体系の中に取り込んだことで、地方政府のアヘン禁止策は実質的に無力化され、せいぜい利益に浴してそそくさと終わるのが関の山であった。

なお、本研究でとりあげる煙幫の多くは四川西部の内地の袍哥で構成されている。雑谷脳河流域の袍哥はこれら内地の煙幫と結び、ひいては内地の煙幫に従属した形で生煙を護送して山を下りることを彼らに委託しており、当地の袍哥自身が煙幫となることはほとんどなかった。雑谷脳老街の劉順陸は、亡父・劉心静が煙幫と結んでいた当時のことを次のように語る。

子供の頃、雑谷脳には幫派が林立していた。父の劉心静は袍哥の五哥で、外からくる兄弟たちを接待する外管事だった。また雑谷脳第一保の保長でもあった。二番目の叔母は磨子溝の劉龔柏の第三夫人で、劉家は成都軍閥と関係があり、弟の劉耀達は国民党の師団長であった。抗日戦争時、劉龔柏は中央軍のために馬を買ったことがあり、こうした関係から銃器とアヘンの

商売をすることができた。当時、劉家は小金の二つの河口一带に土地を借りてケシを栽培し、銃器と弾薬も売買した。アヘン運搬では煙幫に護送してもらい、牛頭山、巴郎山を越え、灌県の園東場まで運んだ。煙幫はほとんどが灌県や郫県、大邑県、街子一帯の漢人で、みな若くて屈強な男たちであり、先頭と最後尾は機関銃で先導、掩護し、真ん中には荷を背負った人夫と驟馬を置いた。もし煙幫に頼まなければ、小規模の土匪が運搬者を捕らえて荷を奪った。煙幫は護送するアヘンの量によってもうけを得た。有名な煙幫には灌

県の袁学東、灌県河西の宋国泰がいた。²⁹⁾劉順陸の回想によれば、袍哥、煙幫、軍閥等の勢力関係は複雑に入り組んでおり、アヘンの運搬と売買では分業は明確であるが、利益に関しては複雑で不明瞭である。総じて、袍哥と煙幫は、終始互恵的な提携関係を保持しながら流域内およびその周辺地区におけるアヘン貿易の市場構造を維持していたといえる。

四 ケシの栽培禁止と地方の権力対話

明末清初、特に乾隆二年（一七三七）に保県城が建設されて以降、内地の小商人や飢饉のために逃亡する者、西北地域の兵士といった類の漢人たちが次第に雑谷脳河下流の

公路沿いに定住するようになり、薛城や通化、威州にも漢人が集居した。時とともにこのような漢人コミュニティは社会と文化の整合を経て、当地の大きな一族は地元民と化し、自身のことを「老姓」「老戸」と称した。例えば薛城の張王李趙徐袁焦の七姓人、雑谷腦の王家、通化の賈家、威州の車家などは、このような裕福な一族である。一族の族長は往々にして新式の教育や時局に関する知識教育を受けており、流域内の利害に関わる仕事で発言権をもつことを望んだ。アヘンの栽培や売買は、当然、民国期の当該区の核心的な利益をもつ仕事であった。

一九三〇年代中後期、特に抗日戦争という特殊な背景のもとで、民国政府は不断に四川当局に圧力をかけ続けたため、四川地方のアヘン禁止措置は以前と比べてやや厳格化された。民国政府は、四川の重要なアヘン生産地区として、特に理番県に所属する第十六専区にアヘン禁止監察所を設置した。³⁰理番県政府はただちに同文の命令を各郷、鎮の役所に出してアヘン禁止を実行に移し、「禁煙治罪条例」を發布して、吸入の禁止、売買の禁止、運搬の禁止等の各方面から具体的な規定を定めた。³¹

理番県政府およびその行政長官は、望もうと望むまいと当地の宗族勢力と対話しなければならなかった。四川政府派遣の県の長官たちは、当初は辺疆政治の振興という遠大な計画と志を胸に抱いているが、理番に入るやすぐにアヘ

ン貿易がもたらす紛争に巻き込まれる。何人かの長官たちは世間の情勢を知って「船を漕ぐ」ことを理解し、またより理想や野心をもつ地方執政者たち、例えば県長・徐劍秋などは元来のアヘンの市場構成に対する支配や改変を狙い、金銭を着服した。しかしこのような思考や方法は、大きなリスクを伴った。士紳(土地の有力者)たちは文字の効用を熟知しており、たった一枚の訴状で県長を窮地に追いやるのができたからだ。

民国二八年(一九三九)の徐劍秋告訴事件において、通化の士紳であった賈開允は終始重要な役割をはたした。当時彼はまだ二五歳だった。幼少より良好な新式教育を受けており、青年時代には成都学院史科で学び、国民党中央軍校成都政訓班に入学した。また、賈家は雑谷腦河下流域の多くの実力派漢人一族と婚姻関係を結んでいた。³²恵まれた教育背景と多方面にわたる一族と社会とのコネクションは、賈開允が当地の士紳の代表的人物になるための先決条件であり、彼自身も地域の政治経済に関する仕事に大きな熱情を抱いていた。

現存する公文書の資料の中に、県長・徐劍秋およびその他政府職員を告訴する文書が十数部あり、告発人は「理番民衆」、賈開允などの士紳、県府の幹事、保安中隊の役人等となっている。これらを通覧すると、賈開允は徐劍秋を告発するために緻密な計画と細心の準備をしたことがわか

る。紙幅の関係で、幾部かの文書を簡略にまとめたものによつて賈開允と徐劍秋との状況の変化を双方向的に描き出してみる。四川省主席を兼任していた蔣介石にむけて理番民衆からだされた上申書は最重要文書であるが、要点は以下のようである。

我が県は辺疆にあつて人民の文化や知識レベルも低いため、中央政府の法令がいかに厳しくとも汚職役人の害毒は依然としてもままであります。昨今各県における禁政は非常に厳しく、人々は恐れをなしておりますが、我が県では今年も紅灯が市全体を覆い、一面にケシの苗が栽培されております。県内の後番で今年産出される生煙の量は数万両を下らず、政府は公然と生煙を正式な租税としており、運搬人もそれによつて正式に納税し、人民はみなケシの栽培や運搬を生業とし、葉草の採集や耕作をする者はなく、田畑は荒れ果て、物価は高騰しております。このような状況下で、来年煙区として復活するならば、おそらく人民はことごとくアヘン中毒になってしまいます。さらに恐ろしいことは、県府がアヘン購入のために転売した銃弾が大量に民間に巡回しており、今後アヘン禁止政策を実施すればならず者たちが必ず騒乱を起こすに違いありません。近年軍や政界から転売される銃は無数であり、ならず者の勢力は以前よりもさらに盛んです。

高名なる閣下におかれましては民を慮つてこれを救い、我々前番の庶民が損害を被ることなきようお願い申し上げます。徐県長が着任して以来過酷な税が多く、紅灯は毎月、一等八〇元、二等七〇元、三等五〇元の三等級に分けられ税金として取り立てられております。……県府は密輸取り締まり隊一〇〇余人を派遣し、一両につき四錢、一〇〇両につき四〇両を課税しており、納めない者があれば完全没収して徒刑に処しております。後番の番民は生煙によつて年貢を納めておりますが、その価格は低く、一両につき合法銀貨でたった一元六角です。……しかも県長および料の秘書官たちはみなアヘン中毒で、毎日アヘン吸引用のランプの下に集まって会議をしており、執務室へと向かうのは少数の下級職員のみです。県長とその妻は一日に四、五回けんかをし、時には互いに銃を持ち出すこともあり、県長はいつも他家に避難しており、人民は伺いをたてにいくことができません。高名なる閣下はこのような民の孤独を気づかい、地方官の行政を一掃する志を発揮していただきたく存じます。思うに必ず徹底的に理を究め、悪人を処罰して悪事をまねる者への戒めとし、而して世論にその旨を申し添えていただけるのであれば、これ以上のことはございません。謹んでここに報告致します。

叩請公安

理番民衆拝呈^③

この上申書によれば、徐劍秋の五つの罪状が明らかである。後番のアヘン禁止政策が緩すぎること、公然と銃器を売買し、辺区の安定に潜在的なリスクを与えていること、前番は過酷で雑多な税金が多すぎること、県長および高級職員がアヘン中毒になり、公務をおろそかにしていること、県長が家庭内のいざこざを引き起こし、極めて下品であること。もちろん、こうした告発の真实性というのは本研究における問題関心の中心ではない。検討すべきは、「理番民衆」が何ゆえに県長を告訴したのか、双方の矛盾はいつたどこにあるのか、ということである。鍵として玩味すべきは「理番民衆」の語が指すものであるが、これが理番県全民衆を包括しているとは到底信じられない。もしも「理番民衆」が賈開允などの士紳の「民衆」に対するちぐはぐな認識を表すものであれば、その推論はいささか独断的かもしれない。文中のコンテキストに即してみれば、「理番民衆」とは確かに比較的限定された意味で用いられていることがわかる。文書にはすでに特定の人民分類方式で「後番番民」と「前番庶民」が明示されており、いうまでもなく、いわゆる「理番民衆」が実際に指しているのは「前番庶民」で、主に雑谷脳河流域、特に中下流一帯の人々である。

一歩進めていえば、賈開允が前番庶民の支持を得られたのは、ケシの作付け売買問題における賈開允と庶民の利益が一致していたからである。矛盾の発端は、徐劍秋のアヘン禁止業務上のダブルスタンダードとその処置にあった。後番では成り行きに任せ、「前番」（雑谷脳河流域）においては厳しい禁政を行った。後番では地理的および社会制度的な特殊性が、当局による実質的なアヘン禁止措置の推進を無力化し、「あたり一面ケシの苗」という事実を黙認した。おまけに、生煙によって租税を納め、生煙との交換によって銃器を入手する、これは後番と徐劍秋政府それぞれに利益をもたらした。しかし反対に、地方当局は雑谷脳河中下流地区に対しては各種の厳しいアヘン禁止措置をとった。例えば三等級に分けた紅灯に対する税の取り立て、一〇両につき四両という高額なアヘン税などである。「貧しさは憂えずとも不平等に対しては憂慮する」というように、徐劍秋が理番県内で実施したアヘン禁止に関する相反する二種類の措置は、雑谷脳河流域の多くのアヘン市場に關係する人々をひどく傷つけた。いうまでもなく、通化の買家を含む大家族の生煙の利益は真つ先に損害を被り、同時に、賈開允は「理番民衆」の身分をもって徐劍秋を告訴するというのが推敲に耐え得る最善の方法であることをはっきりと認識していた。

このような不利な局面に対して、徐劍秋は二方面から解

消を図った。一は、第十六区行政督察の責任者・譚毅武に賄賂をわたし、譚氏が二度と追究できないようにすること、二は、秘密裏に灌渠の殺し屋に依頼して賈開允を暗殺すること。一の計画は功を奏したようで、一九三九年九月に賈開允と理番の民衆、保安中隊長などが譚毅武に告訴文を提出したものの、二カ月経っても譚毅武は明確な態度を示さず、双方はにらみ合いの状態を続けるしかなかった。しかし、事態はすぐに転機を迎えた。賈開允はついに再び徐劍秋を詰問する機会を得、二度目に譚毅武に提出した訴状で、十六区公署に対しても次のように圧力を加えた。

私允は昨夜九時頃友人宅で雑談した後帰宅しましたが、表門までくると門脇から私を見張っていた者たちが迫って参りました。私はぼんやりとその奇異なる様を見、慌てふためいて家の中に駆け込んだところ、数歩もいかぬうちに数発の銃声が轟き、頭上に被っておりました帽子が銃声とともに落ち、発砲者は散り散りに逃げ去りました。以前渠の土紳らとともに渠長・徐劍秋を告発しました一件は、二カ月たっても返答がありませんが、徐氏がこのことを知らぬはずはありません。数日前、徐氏が灌渠派出所威州密輸取り締まり主任・徐成柱をそそのかして允とその仲間の暗殺を謀っていると聞きました。防御をする暇もなく、それが現実起こるに至って誠に遺憾に思い、速やかに捜査の

参考に備えるべきと考えました。さらに最近、徐氏が貴下にくわばくかの賄賂をわたして本案を無効にするとの説も盛んに伝わっております。世間の噂は信ずるに足らずとはいえ、これほど長きにわたり一つの結果も得られぬとなれば、内情を推し量り、疑念もわいてくるのであつて、ゆえに徐氏のこのような行為も何か頼みとするところあつてのことかと疑わしく思います。我が身の存亡はとるに足りませんが、事態が拡大して土地の秩序が糜爛され、允が理番の終身の罪人となり、贖罪の機会を失うことを特に恐れております。あわせて貴下にはこの土地の悩み苦しみを慮り、災いの芽を事前に取り除き、本件をいち早く解決し、もって後方の防備を安んずるようお願い申し上げます。

これには明確に賈開允の怒りと不満が現れている。徐劍秋が狙撃手をそそのかして暗殺を企んだことへの憤慨の他に、允は非難の矛先を第十六区行政督察の責任者・譚毅武にも向け、徐劍秋が口封じのために暗殺者を差し向けられたのは、役人同士がかばい合つてのことであり、譚氏が保護の傘となつたと見なしている。もしも十分に事実を把握できていないのであれば、允は「徐氏が貴下にくわばくかの賄賂をわたして本案を無効にするとの説も盛んに伝わっております」などといわなかつたであろう。允のこの事件における自信は道義上の問題にあり、人に暗殺をくわだて

られるという弱い立場にあつたために巷の同情を得、特に多くの士紳からの支持を獲得し、ゆえに賈氏は「私の一身の存亡はとるに足りませんが、事態が拡大して土地の秩序が糜爛され、允が理番の終身の罪人となり、贖罪の機会を失うことを特に恐れております」などと威勢よく言い放つことができた。これはほとんど譚毅武に対する脅しであり、もし事態が収拾できないところまで拡大してしまえば、必ず行政督察の責任者と地方情勢に危害がおよぶ。

徐劍秋による地方士紳の暗殺は未遂に終わり、さらに事件そのものも発覚し、加えて賈開允が行政督察の責任者に対して自らのカードを切ってみせると、譚毅武は保身のために下位の者を切り捨ててはしかなかった。譚氏はすぐに署務委員会を招集して、徐劍秋を免職にして調査の上処分する決議を採択し、四川省政府に上申書で報告した。

十六区專署による理番県長・徐劍秋免職各案に関する調査報告により、該県長は生煙、銃弾の売買、アヘンの吸飲、殺人教唆および不法逮捕など各項をはたらいており、すべて重大なる犯罪の嫌疑ありとします。該専属は該県長の免職および調査の上の処分を求め、あわせて関係の証明書類は賀秘書長の手を経て保存するとのことであります。⁽³⁵⁾

これから推察できるのは、允を主とする理番の士紳たちは幾度かの曲折を経て県長を弾劾し、それは流域内で熱い

議論を誘発して、三〇歳にも満たない賈開允がこれによって世間に名声を馳せたことである。注目に値するのは、允は徐劍秋との対決において勝利したが、そこでは多数の士紳からの支持がかなり役に立ったことである。同時に、この階層内部の共通意識はまだ薄弱であり、結局、内部には利益要求をめぐる差異があり、甚だしきに至つては一部の士紳は徐劍秋と利益共謀の關係をもつていたことである。

文献の整理を通して、民国八年（一九一九）前後にケシが次第に雑谷脳河流域で栽培され始めたと推論した。同時に、雑谷脳河流域へのケシの流入は地域全体の現象であり、黒水や小金川と同様のこの地域に根差した歴史背景があることを強調した。四川軍閥割拠下の防区制は、アヘン貿易を最も手取り早く軍費を拡充する方法にした。軍閥と地方上層人士による相互的な妥協のもと、理番県は自由にケシを栽培する許可を得た。

ケシの収穫は労働力密集型の仕事である。例えば後番、四土、懋功などのケシの主要生産区では、毎年決まった時期にいつも大勢の一般の収穫労働者や煙幫、アヘン商人が集まり、これは「趕煙会」と呼ばれた。溝と谷が縦横にある雑谷脳河流域は、種々の人々がケシの主要生産区へと入るための交通の要路であり、流域内の各族群もただ近いという理由、あるいは従来の風俗習慣に従つて各地の趕煙会に集まり、これによってアヘンの栽培売買の地域統一体を

構成した。趕煙会という論題では、甘肅洮州臨潭地区を中心とする西北の回族商人による商業実践について注目する必要がある。

注

- 〈1〉「加」朱迪思・懷曼「鴉片和晚清的四川政府」卜正民・若林正編『鴉片政權——中国、英国與日本 1839-1952』弘俠訳、黄山書社、二〇〇〇年、一三四頁。(Judith Wyman, "Opium and the State in Sichuan Province during the Late Qing," Timothy Brook and Bob Tadashi Wakabayashi eds., *Opium Regimes: China, Britain, and Japan, 1839-1952*, University of California Press, 2000)
- 〈2〉 S. A. M. Ashhead, "The Opium Trade in Szechwan 1881 to 1911," *Journal of Southeast Asian History*, No. 2, 1966, pp. 93-99.
- 〈3〉 秦和平『四川鴉片問題與禁煙運動』四川民族出版社、二〇〇一年、一五九、二四五―二四六頁。
- 〈4〉 桑梓候「解放前理県種植鴉片的情況」『四川文史資料選輯』第三十五輯、四川人民出版社、一九八五年、一四三、一四五―一四六頁。
- 〈5〉 雷伯和「解放前理県禁煙紀実」政協理県委員会文史資料編輯委員会編『理県政協文史資料選輯』第一輯、一九九七年、四四頁。薛城の李書漢によれば、雷伯和の母親は雜谷腦河南杜家香号の主人(「杜香客」と呼ばれる)の娘で、雷家もまた薛城では強大な財力をもつ家柄であった。これら
- のことから、雷伯和のアヘンが理番上層社会に流入したことに關する歴史的記憶は、比較的信頼度が高いといえる。
- 〈6〉 理県志編纂委員会編纂『理県志』四川民族出版社、一九九七年、九八一―一、七七一、七七七頁。
- 〈7〉 熊甫「軍閥混戦時期的四川經濟」四川省文史館編『民国四川軍閥実録』第三輯、四川人民出版社、二〇一一年、一七九頁。
- 〈8〉 吳光俊「四川軍閥防区制的形成」四川省文史館編『民国四川軍閥実録』第一輯、四川人民出版社、二〇一一年、二二六、二二九―二三三頁。
- 〈9〉 同注〈8〉。
- 〈10〉 張慧昌「一、三辺軍與三、七、二十一師之戦」四川省文史館編『民国四川軍閥実録』第二輯、四川人民出版社、二〇一一年、一七一―二五頁。
- 〈11〉 同注〈4〉。
- 〈12〉 軍閥が入り乱れての争いは、四川西北を含む四川地区の情勢を激しく動揺させた。一九二四年楊森が灌県駐留の劉成勳部隊の旅团长・鄭世斌を買収して次第に四川西北の情勢をコントロールし、それは一九二五年末に楊森が「統一之戦」に敗れるまで続いた。一九二七年劉文輝が劉成勳勢力を併呑し、川康地区は劉文輝が支配した。一九二八年「国民革命軍四川同盟軍」が劉湘に反旗を翻し、二年間取捨がつかなかった。一九三二―一九三三年の劉湘と劉文輝による「劉大戦」は、劉湘が四川を統一することで終了した。
- 〈13〉 二〇一一年三月二四―二六日、理県桃坪郷羅山寨の楊

- 万清(当時八二歳)に雑谷脳街心花園にて数回話を聞く。
- 〈14〉 顧爾剛『西北考察日記』甘肅人民出版社、二〇〇二年、二二八頁。
- 〈15〉 「德」沃爾特・克里斯塔勒『德国南部中心地原理』常正文、王興中等訳、商務印書館、一九九八年、三一頁。
(Walter Christaller, *Die zentralen Orte in Süddeutschland*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1968)
- 〈16〉 崔潤德「四土紀行(上)」『辺疆服務』第一九期、一九四七年、一二頁。
- 〈17〉 四川民族調査組「卓克基土司統治地区調査」四川省編輯組『四川省阿壩州藏族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社、一九八五年、二六一頁。
- 〈18〉 于式玉「記黒水旅行」『于式玉蔵区考察文集』中国蔵学出版社、一九九〇年、一〇〇―一〇三頁。
- 〈19〉 林耀華「川康北界的嘉戎土司」『辺政公論』第六卷第二期、一九四七年、三九―四四頁。
- 〈20〉 西南民族学院民族研究所「草地藏族調査材料」(内部資料)、一九八四年、一九一―三〇、三七頁。
- 〈21〉 陳秉淵『馬步芳家族統治青海四十年』青海人民出版社、一九八六年、二一八―二二〇頁。
- 〈22〉 同注〈20〉。
- 〈23〉 趙清『袍哥與土匪』天津人民出版社、一九九〇年、王純五『袍哥探秘』巴蜀書社、一九九三年、吳善中『晚清哥老会研究』吉林人民出版社、二〇〇三年。
- 〈24〉 秦和平「对清季四川社会変遷與袍哥滋生的認識」『社

- 会科学研究』二〇〇一年第二期、二〇〇一年、一二三頁。
- 〈25〉 同注〈6〉。
- 〈26〉 四川省編輯組『羌族社会歴史調査』四川省社会科学院出版社、一九八六年、二〇四頁。
- 〈27〉 王毓全「雜谷袍哥」理県政協文史學習委編『理県政協文史資料』第二輯、二〇〇六年、二二頁。
- 〈28〉 二〇一〇年八月八日、薛城老街張家にて劉天祐氏へのインタビュー。
- 〈29〉 二〇一〇年九月一日、雑谷脳營盤街四小隊劉家にて劉順睦氏へのインタビュー。
- 〈30〉 同注〈3〉。
- 〈31〉 雷伯和、前掲「解放前理県禁煙紀実」四六一―四七頁。
- 〈32〉 同注〈6〉。
- 〈33〉 四川省檔案館檔案「繳還理番原民原呈一件」一九三九年、全宗号54、檔案資料号5314。
- 〈34〉 四川省檔案館檔案「四川省第十六区行政監察專員公署呈事密不録由」一九三九年二月一四日、全宗号54、檔案資料号5314。
- 〈35〉 四川省檔案館檔案「四川省政府民政庁簽条」一九四〇年二月、全宗号54、檔案資料号5314。

※本論は「民国時期西北鴉片種販與族群政治——以雑谷脳河流域為中心」として「学术界」総第二二〇期、二〇一五年一月に掲載されたものである。